

意しながら官制や族源問題と取りこんでいる。中斷または集中することなく、研究は同じペースで持續して今日に至っている。今後の研究の深化と、一層の發展とを祈念したい。最後に舊交の好みにて遠慮なく言評したことにつき、著者の諒恕を請うらうである。

(前田 正名)

清末の秘密結社 前編 天地會の成立

佐々木正哉 編

昭和四十五年十二月 東京 巖南堂書店
B5判 二五六頁

本書は、著者が最近巖南堂から出されている一連のシリーズ、「中國近代史研究資料」の一つとして刊行されたものである。著者が中國近代史の研究に精力的に取り組まれていることは周知の事實であるが、本書に即して述べるならば、著者は本書の出される以前すでにロンドンの公文書館に赴いて天地會關係の資料を収集し、『清末の秘密結社(資料編)』として公刊されている。又著者は阿片戦争、清末の排外運動についてもすでに資料集を出しておられる。

本書の意圖は、著者がはしがきの最後にも書いておられるように、反清復明を目標として設立された天地會の起源を明らかにすることに置かれ、その方法としてまず天地會自身が持っていた起源説話を明らかにされ、それに對する専門諸家の解釋を批判的に検討され、次いで天地會の名が初めて世上に現われる機縁となつた林爽文

の叛亂とその當時の清朝が行なつた天地會起源についての調査を考察され、更に康熙から乾隆年間にかけておきた各種結社の叛亂や事件と天地會との關連を比較検討され、天地會の起源を追求しておられる。本書の構成は次の如くである。はしがき、第一章天地會傳承の考察、第一節反清復明根苗、第二節起源説話の解釋、第二章林爽文の叛亂と天地會、第一節林爽文の叛亂、第二節天地會起源の追求第三章天地會成立の背景、第一節天地會以外の各種結社、第二節天地會出現の背景である。さて、本書を章を追つて所感を加えながら紹介して行きたい。

第一章第一節の反清復明根苗から見て行く。著者は天地會の起源を考察するに當つて、まず天地會自身の傳承である「反清復明根苗」とか「西魯序」などの説話を取り上げ、それらが由來する文書を擧げ、その異同を明らかにすることにより、これらの説話を再構成し、その中から天地會の起源に關する史實を取り出そうとされた。

著者の依つた文書は、反清復明根苗(羅爾綱編著、『天地會文獻録』、貴縣縣志局發現的天地會文件、一一三頁)、西魯序(同書、守先閣本天地會文件四一—四三頁)、西魯叙事(蕭一山編、『近代秘密社會史料』、卷二、一一三頁)、西魯序(同書、卷二、三—七頁)の漢文文書であり、これらを比較検討した上、更に英譯のシュレーヘル譯『洪門黨史』、ピッカリング譯『天地會の起源』、スタントン譯『三合會起源傳説』、スターリング譯『洪門傳説』、モーガン譯『傳説三合會史』を参照されている。さて著者はまず「反清復明根苗」を紹介し、その上に諸文書を参照して天地會の成立年代、少林寺の所在、天地會成立に當つての登場人物などを比較検討し、ついで西魯叙事を紹介し、それがシュレーヘル本の壓縮であることをつきと

め、更に西魯序を紹介し、それがピッカリング本の要約であること
を明らかにされている。そのあとで著者は天地會成立の説話を要約
して、「西魯討伐に功績のあった九連山少林寺の僧侶が纓言にあつ
て焼打ちにあったこと、生残りの五人、即ち五祖が逃亡の途中『反
清復明』の銘がある香爐を得て起義を決意したこと、大哥萬雲龍、
軍師陳近南、後五祖と呼ばれる吳・洪・李・桃（又は姚）・林の五
人、五虎大將と稱される吳・方・張・林・楊の五人、更に明の後裔
と稱する朱洪竹等の参加を得て、正確な年代は分らないが甲寅年七
月二十五日に敵血會盟し、八月二十日に兵を擧げ、九月九日に大哥
萬雲龍が戦死したこと、この後五祖が各省に分散して五房を建て、
更に反清復明の運動を續けることになった」といわれる。

次に著者は各テキストに擧げられている地名すなわち高溪（また
は高溪寺、或は高溪廟）、烏龍岡（または烏龍崗）、龍虎山、長沙灣
岳神廟等の比較検討をし、更に著者は四つの漢文文書を用いて、説
話に出てくる重要事件を次の五つすなわち、(一)香爐の發見地、(二)起
義の地點、(三)萬雲龍がいた寺、(四)萬雲龍戦死の地、(五)萬雲龍埋葬の
地にまとめ検討した上で、これらの重要な地名に混亂があると云わ
れ、その理由を説話の非現實性の中に求めておられる。又著者は、
蕭一山編の西魯序のみに特有な人名、地名などを取り上げて追求し
ておられるが、結局それらは天地會の傳承の中にあつたもので、た
だ混亂しただけであるといつて過言ではないとされている。以上が
第一章第一節の要約であるが、これについて附言するならば、天地
會の成立を檢證するに當つて、この様な説話の文書についての比較
検討をしておくことは、説話の信憑性は兎も角としてもまずしてお
かねばならない基礎的な作業だと考えられる。

次に第二節の起源説話の解釋について紹介して行く。著者は本節
では従来の諸説を紹介しながら説話と史實との關連性を明らかにし
ようとされたのである。まず問題になるのは、文書の中に出て来る
西魯という國家の存在である。著者はこの國については從來一様の
解釋がなされているとされる。その一つはシュレーヘルの説で西魯
をエルート（オイラート）と見る考えであるが、これは年代的に無
理である。他の一つは臺灣の吳偉士の考え方でロシアの黒龍江流域
への侵入事件を天地會起源説話の西魯の侵入に對比しているが、こ
れも證據が薄弱であるといわれる。この外スタンソンは、西魯とい
う國の存在に疑いを抱いていたのではないかと述べられ、結局西魯
という國の存在も、その中國への侵入という事件も假定の物語に過
ぎず、ただエルートやロシアの侵入がヒントとなった可能性がある
と結論されるのである。

次に溫雄飛の説、連横の『臺灣通史』、陶成章、蕭一山の説を取り
上げ、これらはいずれもこの説話が明末清初に活躍した鄭氏の反清
運動を素材に構成されたものであるとしていると述べておられる。
まず溫雄飛は『南洋華僑通史』の中で天地會結成の目的と鄭氏一黨
の目的が反清復明であつたという共通點に着目し、天地會の説話を
鄭氏關係の史實にあわせようとしているが、これは無理だと云われ
る。なおこの考えは連横の『臺灣通史』の方が先ぎであり、それに
よれば鄭成功が天地會を創始したという傳説が當時の臺灣にあつた
らしいと云われる。次に陶成章は『教會源流考』の中で、天地會の
始唱者は鄭成功であり、繼續者は陳永華であり、洪門の名稱は明の
洪武帝の年號の一字を取つたものであると云つており、又彼の言説
から見ると天地會内部ではこの様なことが信ぜられていたのである

うといわれる。最後に蕭一山の説であるが、彼は鄭君達を鄭芝龍、萬雲龍を一念和尚朱洪竹を朱三太子に比定し、少林寺の焚燒と類似した史實として『清史要略』、『清代述異』の俠士の話をあげ綿密に考證しているといわれる。

しかし著者はまだこれでは充分ではないとして『東華錄』や『大清聖祖實錄』により、一念和尚や朱三太子の史實を追求し、更に張雲如、甘鳳池、陸同藩等の反清復明の運動を取り上げ、後者の運動指導者の特徴を次の四點即ち(一)中流以上の者で民族主義思想を持ち、科擧の失敗者、(二)特技の保持者、(三)俠士豪傑、(四)明裔を名乗る者にまとめておられる。又著者は張雲如等の事件と説話の比定を行い、五祖は復明運動指導者に、巫七は于漣に、少林寺焚燒の首謀者張建秋、鄧勝は浙江總督李衛に、鄭君達は按察使馬世衍に類似しているといわれる。以上から著者はこの説話の意味を俠士豪傑の事件が通俗的な形で民間に傳承され、反體制的な天地會がこれらの傳統に接し共鳴して、その反清復明主義を彼等の傳統に援用したものであり、その説話は史實とは考えられないとあらまし結論附けておられる。第二節を終るに當って卑見を加えるならば、著者は手堅い史料批判に基づき従来の諸説を充分吸收し論を展開されているので、この説話が結局史實ではなく、むしろ天地會が共鳴し繼承しようとした反清復明主義の傳統を説いたものとされる著者の見解は基本的に正しいと考えられる。

次に第二章第一節の林爽文の叛亂について見て行く。著者は天地會が起した大小の事件を通して天地會の成立過程を考察しようと思圖され、その最初の事件として林爽文の叛亂を取り上げておられる。林爽文の叛亂は乾隆五十一年(一七八六年)十一月に臺灣で勃

發している。この叛亂の時天地會の存在がはじめて注目され、天地會の根源についての追求が行われたが、結局完全に究明することは出来なかつた。林爽文の叛亂についての文獻には、『欽定平定臺灣紀略』を中心として、『明清史料戊編』、『廷寄』、『高宗實錄』、楊廷理撰『東瀛紀事』、『平臺紀事本末』、『道光彰化縣志』、『臺案彙錄甲集』等がある。

まず林爽文の天地會結成と叛亂の原因について本書を要約する。林爽文は福建省漳州府平和縣の生れで、彼の父と共に臺灣彰化縣大里代莊に移住し、成人してからは車挽き、無賴の徒、一時は縣の捕役もした。彼は不法も働いたが、一種の義俠心もあり、同郷の無賴の徒の間では彼を徳とする者が少なくなかつた。乾隆四十九年林は渡臺した漳州人嚴烟から天地會を傳えられている。やがて林は天地會において指導權を握り、首領に推戴され、彼の反體制運動は俄然活潑になつたが、地方官はどうすることも出来なかつた。彼のこの様な反政府運動の背後には乾隆四十七年の彰化縣内の漳州人、泉州人間の激烈な械鬪事件、それに對する當局の嚴罰、楊光勳事件の電公會の結成械鬪事件、それに對する當局の嚴罰、楊光勳事件の逸犯に對する官役の追求、天地會員の查拏が嚴しかつたこと等があり、彼の車輪埔における再度の結盟は自衛のためであつたと云えるだろう。

次に本書に従つて林爽文の叛亂の大筋を述べる。林の聚衆反抗の決意は五十一年十一月總兵柴大紀が營伍巡視の名目で彰化縣に來たことによつて急速に固まつた様である。官側では臺灣道永福、總兵柴大紀以下の文武官の協議と協力により林を捕縛しようとしたが、逆に林側の一計により、官側の多くが戰死し、やがて彰化縣城が落

城した。林は大盟主、盟主大元帥と自稱し、縣署を盟主府、年號を順天と稱し、支配體制を整え臺灣全土の征服を意圖し、諸羅縣城を攻撃した。又南の鳳山縣では林に呼應して莊大田が蹶起し縣城を陥した。これに對し清朝側では翌年一月福建省水師提督黃仕簡、陸路提督任承恩等を三月には前閩浙總督常青を渡臺させたが防戦に終始した。この頃莊大田等は府城を攻撃し、林自ら數萬の大軍を率いて諸羅縣城を猛攻した。これに對して官側は總兵魏大斌を派遣したが敗北した。五月には福州將軍恒瑞が派遣され死闘を續けることになった。五十三年二月には總兵普吉保が鹿仔港に派遣されたがうまく行かず、五月提督藍元枚が渡臺して來たが軍營内で病没した。最後に清朝は吏部尙書、協辦大學士で清朝隨一の名將と目されていた福康安を十一月に派遣し、彰化縣、諸羅縣を下し、大里杙も陥落させた。林爽文等に續いて莊大田等も捕えられ、三年に亘って臺灣全土を席捲した叛亂も鎮定されたが、林側では數十萬人が参加し一萬五千人以上が殺され、官側では七萬が参加して、將兵四千七百餘の死者を出した。

以上が叛亂のあらましであるが、著者はこの叛亂の原因を基本的には郷黨意識の對立、より直接的にはそれに基づく郷村構成とその對立關係や官憲の彈壓に見出しておられる。又叛亂の主力は佃戶層であり、貧農や下層勞働者を中心とする階級鬭争的な性格を持っており、この叛亂の背景には地方行政の問題、特に地方官や武官の橫暴虐政、私利追求のため不正な收奪があったと述べておられる。最後に卑見を加えるならば、著者も云つておられるように臺灣が新興の土地であり、出身地別の村落を形成し對立し合つていたといふことは、臺灣が本土から海を距てていることとあいまって確かにこの叛

亂の原因となつたであらう。それと同時に林の結盟ならびに叛亂がもともと當時の清朝の彈壓に對する自衛のために行なわれたという事實や、この叛亂の背景に當時の地方官や武官の橫暴虐政、不正な收奪があつたといふことはこれ以後の天地會やその他の秘密結社の運動と合わせ考える時、注目に値するであらう。ここからこの叛亂を通して天地會の運動が益々反清復明、反體制の方向へ傾斜して行つたと考えられる。

次に第二節天地會起源の追求を要約する。林爽文の叛亂についての閩浙總督常青の最初の上奏は林の結黨と騷擾に關してであり、常青がはじめて天地會の存在を知るのは、五十一年十二月に捕えられた楊咏等を訊問した時である。楊咏等は天地會の創立者が洪二房和尚と朱という少年であること、林等の天地會結成とその入會方法を明らかにし、林に嚴烟が傳えたことも自白した。この結果乾隆帝の命が下り、天地會關係者の搜索と天地會の起源が追求されることとなった。まず廣東省内で許阿協等四人の會員が逮捕され、天地會の成立を乾隆三十二年と答えている。次に莊大田が暗號等を自供している。更に嚴烟が逮捕され供述している。彼の供述によれば、天地會の創始者が李姓、朱姓の二人で、天地會の發祥地は四川であり、馬九龍と四十八人の和尚の傳説があり、廣東で天地會を創立したのが萬和尚俗名涂喜であり、廣東から漳州地方へ天地會を傳えたのが趙明德であること等が判明した。その他入會方式、朱、李兩家と洪の字の暗號等が明らかにされている。ここで著者は天地會の始祖説話を検討され、始祖を李朱の二姓にするか、李朱洪の三姓にするかは問題であるが、嚴烟の頃には兩方の説があり、五祖を始祖とする説話のできるのはそれより後であらうとされている。

嚴烟の供述に基ずいてまず張破險狗が捕えられた。彼の供述によれば乾隆四十六年趙明德や陳丕等が賭博を開いた時に入會を勧められ入會したと述べている。次いで廣東で陳丕が捕えられ、傳會の僧人提喜のことについて彼がまだ生きてると供述している。これにより搜索した所、提喜の子供である行義という僧が見附かった。行義の供述によれば提喜は彼の父親であり、洪二和尚と呼ばれていたがすでに乾隆四十四年に死亡したというのである。これに對し乾隆帝は洪二和尚が重要人物であるとして福康安に追求するよう命じている。その後乾隆五十七年泉州府で天地會の組織が摘發され、陳蘇老以下が逮捕された。その供述に洪三房、朱紅竹が天地會を起したとあったので乾隆帝は洪二和尚が洪三房に當るのではないかと考え追求させているがこれも失敗に終っている。

次に著者は戴玄之の説に言及し、戴氏はその著『天地會的源流』の中で天地會の創始者は洪二和尚であり、創始の年代は乾隆三十三年、創始の地點は福建省漳浦縣高溪鄉觀音寺、洪二和尚提喜は萬和尙提喜即ち萬雲龍であるとしていと云われる。又著者は戴氏が乾隆帝と同様提喜が天地會の創始者であるとして、提喜の確證が出来ていないからその説は疑問であるとされ、林爽文の亂當時の天地會員の供述は天地會の起源に關する限り一種の傳説と見做した方がよいとされる。最後に附言するならば天地會員の供述をもとに天地會の起源を追求することは意味のあることだと思われる。

第三章第一節天地會以外の各種結社を要約する。著者は天地會の創始には特定の個人や地點はなく、民間の各種結社の影響を受けて天地會の組織が形成され、他の結社の事跡まで天地會に引き繼がれ

てその起源説話になったことも考えられると述べ、その場合敵血による結盟方式や組織方法、暗號の由來なども天地會以前の各種結社に求めてみることも必要だろうとされ、それに關係のある林爽文亂以前の五つの事件を取り上げておられる。

まず第一は四川忠州楊成勳謀逆事件（一七二九年）であり、この事件は王家久（又は王可久）なる者が自分の家に四十餘名の人々を集め血酒を飲み兄弟の誓いを立て、忠州に楊成勳と稱する楊家將が現出し彼の家には金鑲の玉印と劉伯溫の碑記があると述べ一同に援助を求めたという楊大銘の自供に基づき忠州から楊家へ軍隊が派遣された所、楊成勳はすでに自殺して關係者が逮捕され楊成勳が企てた謀逆は未然に彈壓されたというものである。なお著者は劉伯溫の暗號や碑を手掛りにして天地會の傳説や詩編を検討してみるとその中に四川から傳えられたことを示す痕跡が幾つかあるといわれる。

第二は福建建寧府老官齋の叛亂（乾隆十二年）であり、著者はまず羅教の信仰對象である八拜を取り入れ西魯序の八拜之用が作られたのではないかと云われ、老官齋の叛亂に言及される。この事件は羅教の會首陳光耀が逮捕されたので巫女の嚴氏が陳光耀を救出しようとして叛亂を起し、官兵によって鎮壓されたものである。この事件がきっかけになって羅教結社の實態が幾分明らかにされた。それによって羅教と天地會との類似點を更に見て行くならば、両方とも信徒間の横の關係が重視され兄弟の關係と見られた。次に羅教では五堂があり、天地會には五房の組織がある。又羅教の開教説話に土魯番遠征の物語があり、天地會の起源説話はこの影響を受けたのではないかと著者は云われる。更に羅教と天地會の起った地方が地理的に一致している。以上から考えるならば羅教の教會組織や信仰對

象、始祖説話等が俗化されて天地會に採り入れられた可能性があるとされる。次に羅教を通じて白蓮教の傳統が天地會に傳えられた可能性も考えられると云われる。例えば白蓮教の傳説の中の教主劉奉天の叛亂の物語は天地會の起源説話の西魯討伐の話とよく似た點がある。この關係は陶成章の洪門傳説では一層明確化されており、例えば天地會の五祖はもとみな白蓮教徒であつたとしている。更に白蓮教の武場の影響を天地會は受けたのであろうといわれ、白蓮教の武場は五旗に天地會は五房に分れており、天地會と白蓮教の編成は大體一致している。以上から羅教や白蓮教と天地會とは或る程度のつながりがあつたことは否定できないだろうと云われている。

第三は福建邵武縣鐵尺會事件（一七五二年）であり、これは元來自衛の爲に組織された鐵尺會という團體が鄉村内で横暴となり、僞の馮據や僞の令書を發行して反亂を企て翌五十三年官憲に鎮壓されたものである。この團體の發生發展の過程は天地會の成立過程を考へる場合大いに參考になると著者は云われる。第四は湖北荊門州孫大有・何佩玉等謀逆事件（乾隆三十二年）であり、これは孫大有なる者が明裔と稱して巧みに何佩玉等に取り入り彼の一族を動かして明朝再興の兵を擧げようとしたものであり、著者はこの様な反清復明の主張により同志を糾合できたことは注目しと述べておられる。第五は福建建寧府僧人覺圓等結盟事件（乾隆三十三年）であり、この事件は僧侶覺圓が結盟し無知な農民から錢文を騙し取つていたもので、ここで注目されることは僧侶が不法の主謀者になつたといふことと異姓の人々が結拜して兄弟の誓いを立て相互扶助を約していることだと云われる。以上をまとめて著者は、雍正から乾隆年間起つた投機的な叛亂や結社の組織や招人の方法、傳説や豫言

などを見ると天地會と類似した點が頗る多く、天地會はこれらの結社の諸特徴を廣く吸收することによって生れたと解釋出来るだろうと結論附けられる。さて著者のこれらの分析を通して天地會がそれまでの結社と密接な關係にあることが明瞭にされたと思われる。

次に第三章第二節の天地會出現の背景について見て行く。著者は天地會が結盟に當つて歃血結拜し天地を拜して反清復明を誓う點にその特徴があつたからこの結盟方式をたどることによって天地會出現の背景を探るのが最後の問題であると云われる。まず羅爾綱氏の所説に觸れ、結盟が水滸傳の模倣でありその創始が康熙年間であるといふのは早計だと思われるが、同氏が天地會の結社方式の特徴に注目した點は學ぶべきであり、その事實は臺灣に豊富に残されていると云われる。以下本書を要約する。初代の臺灣府諸羅知縣季麒光の「嚴禁結拜示」を見るとこの地方で結拜の風習が盛んであつたことが分る。それでは何故結拜が盛んに行なわれたかということであるが、臺灣では異姓雜居が支配的であり孤立し勝ちであつたので、結拜が異姓人相互の平等互恵を主な目的とした一種の共同扶助組織となつた。しかし結拜は官憲の彈壓の口實となつたので次第に秘密化され反體制的な性格を強めたが、この過程を示すのが以下に述べられる臺灣で起つた大小の叛亂である。そこでこれらの民亂において結社組織が如何なる役割を演じ、その組織や性格がどう發展して行つたかを具體的に検討するといわれる。

著者は八件の事件を取り上げられる。第一は吳球謀亂事件（一六九六年）でこれは吳球と朱祐龍なる者が明朝復興を企圖し同志を集め反亂を計畫したが、地方官に内通する者があつて擧兵に至らないうちに彈壓された事件である。ここでは歃血結拜については明確で

ない點もあるが、現政權に對する不滿が復明の主張となつて現われていることなどこれ以後の叛亂に共通して見られる特徴がすでに具備されていると著者は云われる。第二は劉却の叛亂（一七〇二年）であるがこれは諸羅縣の管事で敵血爲盟していた劉却が黨員にそのかされて兵を擧げたもので、著者はこの叛亂は結拜集團の最初の叛亂であるがその動機や意圖は不明であると云われる。

第三は朱一貴の叛亂（一七二一年）である。この叛亂は朱一貴等が知府王珍の虐政と結拜に對する彈壓に反抗し、まず擧兵を決議して岡（崗）山に集結し、岡（崗）山營を襲いやがて臺灣全土を手中に納め朱が中興王、杜君英が國公となり年號を永和と定め新王朝を樹立したが、彈壓されたものである。この叛亂はその規模において林爽文亂に次ぐ大亂であり、また叛亂の原因が林爽文亂と類似しているが、ただ朱が明裔を稱し反清復明の旗幟をかかげていた點は林爽文亂に見られなかつた所であると著者は云われる。この叛亂の翌々年に日本で刊行された『通俗臺灣軍談』には朱等が擧兵するに當つて反清復明の誓いをし、天地を祭り、敵血して結拜した獨特の結盟方式が描かれていたがこれを原型として天地會の結盟方式が形成されただろうと著者は云われる。

第四は吳福生の叛亂（一七三二年）であり、これは朱一貴の叛亂を眞似て吳福生が仲間を誘い敵血結拜し岡山營に放火し叛亂をおこしたがたちまち鎮壓されたものである。即ちこのことは朱一貴を英雄視し彼の結義擧兵の方式を叛亂の一つの定型として自らその衣鉢を繼ごうとする者が少なかつたことを示していると云われる。

第五は黃教の叛亂（一七六八年）であり、兵役の追求を受けていた黃教が府城の倉庫を掠奪しようとして決意し、三十八名を集め朱一貴の

亂と同様岡山に集結し岡山營を襲撃したが、叛亂は鎮定された。第六は陳虎等拜盟樹旗事件（一七八二年）であり、この事件は陳虎等が住民を威嚇し掠奪するため拜盟聚飲し「順天行道……」の旗を立てた事件である。これがもし「順天行道」の誤字とすれば天地會が常用した記號と一致すると著者は云われる。第七は臺灣の小刀會（一七八二年）である。小刀會の名が始めて見えるのは既述の漳、泉人間の械鬪の時の上奏文である。その後鄭光彩が小刀會を結成して嘉慶五年（一八〇〇年）に彈壓されたが、この時の供述によれば小刀會においても結拜の際拜天立誓、敵血が行なわれていたことが分ると云われる。

著者は最後に「拜父母會」と「拜天地會」の事を述べておられる。雍正六年（一七二八）諸羅縣で父母會なる結社が存在し敵血拜把していることが發覺した。次いで同九年廣東潮州府饒平縣で己革武學餘親による拜父母會なる結社が出現しここでも敵血結盟をしている。更に道光、咸豐年間の廣東三合會で拜父母會と類似した結盟作法が行なわれていた所から見ると餘親等の拜父母會が廣東一圓にひろがり三合會になつたのではないかと著者は云われる。又著者は羅爾綱、蕭一山、簡之文の所説を援用して三合會は天地會の別稱であり、兩方とも拜父母會（本書二四八頁十五行目では「拜天地會」となっているが恐らく誤植であらう）に由來し、その結盟作法も又同じであつたと云われる。

次いで著者は天地會の創設の時期に觸れ、その存在が確認できる上限は張破險狗が天地會に加入した乾隆四十六年であり、その出現もこれに近い時期であらうと云われる。次に問題になるのは天地會發生の地域であるが、林爽文亂當時捕えられた天地會員の住所等を

調べてみると、平和縣、詔安縣、漳浦縣、饒平縣になっており、天地會が創始されたのは大體この地域に限定されるだろうと云われる。以上第二節を要約して著者は天地會の最も大きな特色であった異姓人の歎血結拜が最も盛んであったのは臺灣であり、住民はこの結拜組織によって利益を保護した。その現れが朱一貴の叛亂であり、この叛亂を経て歎血結拜と「反清復明」の政治的主張とが一體となつて、叛亂乃至は反體制組織の一種普遍的な形態が民衆の間に定着した。これを受け繼ぐのが拜父母會であり、更にその結拜方式を繼承して三合會や天地會が結成されたのだとあらまし結論附けられる。これで明らかな様に著者は結盟方式をたどることにより天地會出現の由來を追求されたが、これは天地會の成立を究明する一つの重要な手懸りとなつたと考えられる。

本書を終るに當つて著者はあらまし次の様に云われる。即ち天地會は中國各地で起つた事件や豫言、傳説、例えば白蓮教や老官齋の傳説を攝取して「反清復明根苗」を中心とする起源説話を作り、自

らを政治結社或いは民族結社として生長させて行つたが、その根本は臺灣の歎血結拜から出發し、それが朱一貴の叛亂を経て政治的民族主義的結社に發展し、更に獨特の結盟方式を採ることになつても普遍的な反體制組織として完成されるに至つたといふのである。最後に本書の意義について卑見を二三述べさせていたたく。本書は今までの傳承、史料、研究を整理され、これに綿密、堅實な考證を施されており、筆者の様にこの方面に筆を染めたことのない者に對しても説得力を持つてゐる。又著者は天地會が反清復明の反體制の傳統に立つ結社であることに目をつけられ論を進めておられるが、これを押し進めれば祕密結社が中國近代史の反帝國主義反封建主義の擔い手になつたということに連らなるのではないかと思われる。この様な點から林爽文亂以後の天地會の發展と活動を述べられるといふ後編の出版が待たれる。なお筆者の至らなきの故に論旨を誤解している所があるのではないかと恐れる。

(深澤 秀男)